

# 発達性読み書き障害者の社会生活での困難への対応

— コーピング・ストラテジーの検討 —

漆澤 恭子<sup>1</sup> 阿子島茂美<sup>2</sup> 遊佐 規子<sup>3</sup>

## Dealing with Social Life Difficulties of Individuals with Developmental Dyslexia and Dysgraphia — Examining Coping Strategies —

URUSHIZAWA Kyoko AKOSHIMA Shigemi YUSA Noriko

本研究は発達性読み書き障害者の社会適応の現状を明らかにすることを目的とし、直面する困難とそれに対応しているかをコーピング・ストラテジーの視点から現象学的解釈分析法により分析を行う。

10代～50代の6名の発達性読み書き障害者が社会で直面する困難への対処方法について、半構造化面接法により得られたデータを現象学的解釈分析により検討した。基礎的テーマとして物理的コーピング・ストラテジー、社会的コーピング・ストラテジー、認知的コーピング・ストラテジーが析出され「個別性のあるコーピング・ストラテジー」が上位カテゴリーとしてまとめられた。参加者は中核的な困難である読み書きに加え、聞き取る困難も語っており、生活場面で聞く、読む、書くが障害となっていることが示された。年齢が上がるにつれ認知的コーピング・ストラテジーの使用が特徴的であり、困難の自覚から自己努力によって創出した独自の対応方法を持つことで積極的な社会適応を実現している。

キーワード：発達性読み書き障害、社会適応、困難、コーピング・ストラテジー、あったらうれしい支援

### 1. 問題と目的

発達性読み書き障害（発達性ディスレクシア）は発達障害の一型である「学習障害」の中核的障害である。学習障害とは全般的な知能が正常範囲にあり、視覚や聴覚などの末梢感覚器の障害がなく、学習環境や本人の意欲にも問題がないにも関わらず、「読み書き」や「計算」などの特定の領域における習得困難が見られる状態を指す（稲垣ら、2010）。学習障害の中で最も知られており、かつ病態解明が進んでいるものが「発達性読み書き障害」である。国際ディスレクシア協会（IDA）（2003）の読字障害の定義では発達性読み書き障害（ディスレクシア）は神経生物学的原因に起因する特異的学習障害であると述べられている。「発達性読み書き障害とは、神経生物学的な原因に起因する特異的な学習障

害である。その特徴は正確かつ（または）流暢な単語認識の困難さであり、綴りや文字記号音声化の拙劣さである。こうした困難さは典型的には言語の音韻的要素の障害によるものであり、また、通常の授業も効果的ではない。二次的には結果的に読解や読む機会が少なくなるという問題が生じ、それは語彙の発達や背景となる知識の増大を妨げるものとなり得る。」と定義されている。病態として単語認識の困難と綴りや文字記号音声化（＝デコーディング）の拙劣さをあげている。

学習障害のある人はその認知特性から社会適応に困難がある。佐藤（1999）は幼稚園及び保育園児の学習障害児を対象に社会的不適応の原因の分析を行ったが、幼児期においては社会的スキルが少なく、指導後も改善はあるものの定型発達児と比較す

1 植草学園短期大学  
2 元十文字学園女子大学  
3 千葉県柏市立第三小学校

ると社会参加は少ないと報告した。宇野ら（1999）は学習障害児および周辺児・者の日常生活におけるハンディキャップを家族を対象にアンケート調査を行った。周囲から誤解される、いじめられた等の理解を得られず、社会適応が困難な状況を報告している。社会参加のためには自己努力では解決しないことも多い。全国LD親の会（2011）は教育から就業に向けた課題を取り上げ、当事者と家族を対象とし成人した学習障害者の就労に関する調査を行った。卒業直後の一般就労率は37%である。しかし一般就労以外も含めた全体での離職率は1年以内が37.5%と多く、長い期間働き続けることの困難が数値として示された。周りの理解が得られにくい、仕事が覚えられない等の多くの課題が示された。発達性読み書き障害者の社会生活も適応状況は決して良くない。文字の読み書き困難は進学や就職において不利益をもたらしている。合理的配慮を受けてもなお入学試験は書字が基本であり、書字速度と正確性の困難のための不利益（阿子島ら、2013）や、不登校の発生率も小学校10～30%、中学校50～60%（小枝、2001；石井ら、2008）と高く二次障害を起こしていることも多い。また、読み書きの機会の減少による読書量の少なさ等も起因して、社会適応に多くの困難を抱えている。

発達性読み書き障害者が日常生活をどのように捉え、遭遇する困難にどのように対応しているのかを当事者の意識に視点をあて、困難への対応方法について実態を明らかにする。方法として質的研究方法の1つである現象学的解釈分析法によって分析を行う。発達性読み書き障害者の社会適応の方途を探るうえで貴重な情報となると考える。

## 2. 方法

参加者：発達性読み書き障害者6名（男2名女4名  
年齢：10歳代～50歳代 所属：生徒・学生3名、  
会社員等3名）

調査期間：X年3月～7月

選定条件：就労・通学状況は良好であり、社会適応状態にあること。インフォームド・コンセントを行い、研究に同意を得られていること。

方法：本研究は半構造化面接法により参加者の発言を記述、コーピング・ストラテジーの視点から分析

を行う。分析方法として現象学的解釈分析（Interpretive Phenomenological Analysis = IPA）を用い、記述内容から基礎的テーマ・上位カテゴリーを選定し検討を行う。新しい研究方法であり歴史は浅い。参加者が自身の体験の意味付けを試み、次いで研究者が参加者の体験の説明と意味付け・解釈を行うもので研究者との間の動的な過程に重きを置く。本研究はこれまでになかった発達性読み書き障害者を対象にし、この方法を使用することで発達性読み書き障害者の内面生活をより鮮明に浮かび上がらせることができると考える。

また、分析の視点はコーピング・ストラテジーとする。石坂（2010）は成人の事例について、支援のあり方とコーピングの必要性について述べている。しかし発達性読み書き障害者自身がどのようなコーピング・ストラテジーを使用しているかの研究はこれまでにはない。コーピングとは本来はストレスの対処方法の概念であるが、発達性読み書き障害者の困難への対処方法の分析にも有効な視点であると考ええる。ラザルス（1984）はストレスへの対処パターンを2つのストラテジーと8つの対処型に分類している。本研究では基礎的テーマとしてストレスの対処パターンの分類を行う。

手順：Smithら（2009）のIPA手順に従った。まず、面談を録音し発言を文章化した。次に発言ごとに要点整理と解釈を行った。そのデータをもとにテーマを選定し、テーマと参加者の注目すべき反応を記した。そののち、テーマをリスト化し、関連テーマをまとめ、参加者が述べたことと乖離がないかの検討を行った。検討の手順はまず心理臨床を専門とする研究者1名によってカードの分類と各群に相当と考えるテーマの選定を行った。次に選定されたテーマについて教育の専門家1名が参加者の陳述との乖離がないかの検証を行った。最後に2名で検討を繰り返した結果、乖離している陳述はないと判断した。テーマの原リストから一定の配列を行い、基礎的テーマを構成した。最後に基礎的テーマから上位テーマの特定を行なった。質問項目は困難に対する対処方法について、聞く、話す、読む、書くの4つの場面において「普段の生活の中で困ることは何ですか?」「どのように対応していますか?」を中心に行う。さらに「聞く、話す、読む、書くの中で一

「一番困難を感じるのはどの場面ですか?」「あったらうれしい支援は何ですか?」の質問も行う。

### 3. 結果

#### (1) 基礎的テーマと上位カテゴリー

物理的コーピング・ストラテジー、社会的コーピング・ストラテジー、認知的コーピング・ストラテジーの3つが析出され、「個別性のあるコーピング・ストラテジー」が上位カテゴリーとしてまとめられた。

#### (2) 聞く、話す、読む、書くの中で一番困難を感じる場面

聞くがもっとも困難であるとの回答を5名から得た。生活場面では音声言語による情報交換が主流であり、聞き取ることが障害となっていると参加者は感じていた。一方、話すことが困難との発言はなかった。読み書き障害者の社会生活は職業や身分によって困難は大きく左右されると思われるが、いずれの環境でも聞くことに多くの困難を感じていることが明らかとなった。追加質問を行ったところ、聞いたことをすべては覚えられない等のワーキングメモリーの弱さ、単語の音節を入れ替わって聞きとってしまうなど、音韻情報処理過程の困難が語られた。

対応方法では認知的コーピング・ストラテジーが使用されていた。自己の認知特性の強みであるトップダウンの情報処理過程を利用する、聴覚的ワーキ

ングメモリーの弱さに対しては、キーワードの即座の判別と他の情報の意図的遮断による情報量の調整という認知的コーピング・ストラテジーの創出である。

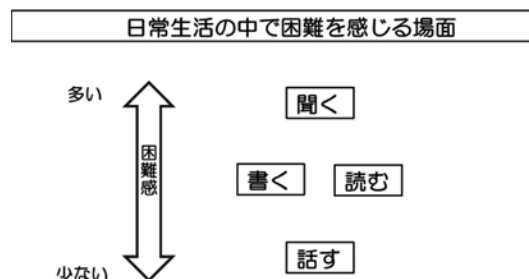


Figure 1 日常生活の中で困難を感じる場面

#### (3) 直面する困難への対応方法の分類

参加者の発言をコーピング・ストラテジーの視点から3つに分類した。

物理的コーピング・ストラテジー：カラーフィルター、拡大コピー、付箋を使用するなど物を媒介とする対処方法

社会的コーピング・ストラテジー：話や文章の内容を同僚・家族に要約して伝えてもらう、みんなが話をしているところに移動する等、人を媒介とする対処方法

認知的コーピング・ストラテジー：部分から全体を推測する、必要と思われる部分だけの情報を得て、他は意識的に省略する等自己の認知処理を媒介とする対処方法

表1 対応方法の分類 —3つのコーピング・ストラテジー—

基礎的テーマ	困難への対応方法 (例)
物理的コーピング・ストラテジー	携帯電話 iPhone iPad カラーフィルター 文字拡大
社会的コーピング・ストラテジー	人に解釈してもらう 尋ねる 読んでもらう
認知的コーピング・ストラテジー	重要と思うところを選択して他は省略 トップダウン情報処理をする

(4) 直面する困難への対応方法

対応方法は主に認知的コーピング・社会的コーピングを使用していた。

① 聞く

「聞く」ことが日常生活で困難を多く感じていた。

表2 場面ごとの対応方法「聞く」

コーピング・ストラテジー	対応方法	聞く困難
<b>認知的コーピング</b>		
—トップダウン—	何の話かは分かるので、大切なところだけを聞いて、覚えておく。あとは意図的に聞き逃すようにしている。	言っていることの全部はわかりません。
—ワーキングメモリー—		
<b>社会的コーピング</b>		
—人的支援を求める—	「何をどうすればいいのかわかりません。教えてください。そうしないと私にはわかりませんので、」と言って、後で質問をして聞くようにしている。	さっぱりわからない。
—情緒的対応—	ただにこにこして聞き流す。	友達同士の話でも、スピードが速いと何を話しているかわかりません。
<b>物理的コーピング</b>		
—環境の変更—	がやがやと周りでいろんなことを言っているところに行く。みんなの話から大体を推測してわかる。	さっぱりわからない。
—時間の変更—	資料があるときは後で読んで何とかしている。	打ち合わせなどは大体はわかる。

② 読む

できないことが語られた。対応方法は認知的コーピング・社会的コーピングを多く使用していた。

「読み」(読解レベル)は正確性よりも速度に対応

表3 場面ごとの対応方法「読む」

コーピング・ストラテジー	対応方法	読みの困難
<b>認知的コーピング</b>		
—キーワードの選定—	時間とか場所とか必要なことだけをみます。	意味が読み取れない。
—ワーキングメモリー—	あとは飛ばして読みます。	
—トップダウン—	ぱあっと読んで、あとは時間のあるときに読むようにしています。	
<b>社会的コーピング</b>		
—人的支援を求める—	みんなががやがやしているところに行く。おしゃべりを聞くとヒントになってわかるから。	
—人的支援を求める—	家族に読んでもらう。 大切なところをまとめてもらう。 一番よくわかる。	
<b>物理的コーピング</b>		
—補助—	キーワードをポストイットにメモします。	
—補正・調整—	拡大コピーします。 iPadで読むようにしてる。	
—環境の変更—	静かなところに行きます。でもあまり読まないけど……	



- ③書く  
「書く」各個人のバラツキが大きく、対応も個別性があり日常生活で障害を強く感じていた。コピーング・ストラテジーなしに分類されたものがあることから推察される。対応方法は主に物理的コピーング・社会的コピーングを使用していた。

表4 場面ごとの対応方法「書く」

コピーング・ストラテジー	対応方法	書きの困難
認知的コピーング	文字の特徴を見つけて、強調してそれらしく書いている。	自分の名前を書いたつもりでも人はそう読んでくれない。
社会的コピーング		
—人的支援を求める—	同僚や友達に書いたものを見てもらって、直してもらおう。	綺麗な文字が書ける。メモも書ける。でも文章となるとまとまらず困難。
—人的支援を求める—	練習を何回もしたが……親に助けてもらおう。	自分の氏名、住所を書くことが大変。
物理的コピーング		
—代替え—	ワープロの予測変換を活用。	簡単な文章は書けるが、長くなると無理。
—代替え—	パソコンで音声入力をして書く。	話すのはうまい。書くの苦手。
コピーングなし	とにかく黒板を写す。	黒板の文字はきれいに写せる。でも、ノートに書いた自分の文字を読めない。
なし	とにかく何か書いて提出している。	作文を書くのが大変。

- ④話す：特になし  
「話す」では特に困難を感じる発言は見られなかった。

- ⑤あったらうれしい支援  
「家族に読んでもらおう。」「家族にまとめて話してもらおう」との発言を得られた。家族からの支援は気兼ねないこと、分かるように伝えてもらえることが語られた。負担感が少なく、当事者に一番わかりやすい支援方法であることが推察される。

#### 4. 考察

- ・それぞれ読み・書きの困難を抱えているが、スティグマは感じられなかった。困難を受けとめている印象であった。
- ・社会適応のためにそれぞれが物理的及び社会的コピーング・ストラテジーを使用しているが、年齢が上がるにつれて自己の認知特性を意識し、得意な認知方法を使った認知的コピーング・ストラテジーの使用が特徴的であった。その中で部分から全体を

推測するトップダウン情報処理（勘働き）の使用が印象的であった。トップダウン情報処理は蓋然的な意味理解が得られるため「聞く」「読む」場面で多く使用されていた。この方法は情報の正確性には欠けるものの全体の意味理解を可能とする。時に読み違うリスクがあるが、現実的にはそこを他のコピーング・ストラテジーが補完しあっていると推察する。トップダウン情報処理（勘働き）の研究が今後の支援方法として大いに期待できると考える。

・「聞く」が生活場面で最も困難であることを、これまでの研究は明らかにしてこなかった。「聞く」を支援方法の検討の中核に位置づけることが早急の課題である。

・発言の中に「本が好き」「本をよく読む」が複数あった。発達性読み書き障害は読みの健常者との連続性の上であって、創造性や知識欲は障害されていないことが示唆された。正確性より読む楽しさ、想像の楽しさを享受し積極的な日常生活の実現を志向していると考えられる。

## 謝辞

本研究にあたり快く協力をしてくださった参加者の皆様といつも労を惜しまず研究に協力をして下さっている「発達性読み書き障害の支援ツール開発研究会」の皆様深く感謝申し上げます。

## 付記

研究の実施に当たっては、十文字学園の倫理審査委員会の承認を得た。また本研究は、JSPS 科研費 25381321（平成25年から27年度基盤研究C「発達性読み書き障害の支援ツール開発」）及び十文字学園女子大学プロジェクト研究費の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 1) 阿子島茂美・漆澤恭子・三枝隆 (2013) : 読み書き障害の支援方法—合理的配慮—日本教育心理学会第55回総会論文集, 406.
- 2) 稲垣真澄・小林朋佳・小池敏英・小枝達也・若宮英司・稲垣真澄 (編) (2010) : 特異的発達障害 診断・治療のための実践ガイドライン—わかりやすい診断手順と支援の実際—診断と治療社, 26-27.
- 3) 石坂郁代 (2010) : 特異的発達障害 診断・治療のための実践ガイドライン—わかりやすい診断手順と支援の実際—。診断と治療社, 76-79.
- 4) Jaci C Huws, Robert SP Jones (2015): Tm really glad this is development: Autism and social comparisons-an interpretative phenomenological analysis Autism. January, vol.19 no,1 84-90.
- 5) Jonathan A.Smith, Paul Flowers, Michael Larkin (2009): Interpretative Phenomenological Analysis: Theory, Method and Research.
- 6) 国際ディスレクシア協会 (2003) 定義.
- 7) Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984) Stress, appraisal and coping. New York: Springer.
- 8) LD親の会 (2011) : 教育から就業への移行実態調査

報告書Ⅲ.

- 9) 宮本寛・春樹豊・織田正美 (監訳) (1991) : ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—実務, 教育出版.
- 10) 文部省 (1999) : 学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議 <[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/002.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/002.htm)>
- 11) 文部科学省 (2013) : 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301.htm)>
- 12) Nicholls, A.et al. (2005): A phenomenological analysis of Coping Effectiveness in Golf. The Sport Psychologist, 19 (2), 111-130
- 13) 佐藤容子 (1999) : 学習障害児の社会的不適応の原因の分析と指導方法の開発. 科学研究費助成事業データベース1998-1999 <<https://kaken.nii.ac.jp/d/p/10610128.ja.html>>
- 14) 田中美恵子 (2007) : 看護研究の方法論としての解釈的現象学 <[http://arch.luke.ac.jp/dspace/bitstream/10285/5836/2/2010008-gakkai14\(1\)-5836.pdf](http://arch.luke.ac.jp/dspace/bitstream/10285/5836/2/2010008-gakkai14(1)-5836.pdf)>
- 15) 宇野彰 (2004) : 発達性 Dyslexia. Molecular Medicine, 41 (5), 601-603.
- 16) 宇野彰 (2004) : 発達性 Dyslexia. Japanese Journal of Cognitive Neuroscience, 6 (2), 36.
- 17) 宇野彰・春原則子・金子真人・粟屋徳子 (2007) : 発達性 dyslexia の認知障害構造—音韻障害単独説で日本語話者の発達性 dyslexia を説明可能か?—. 音声言語医学, 48, 105.
- 18) Uno A・Wydell TN・Haruhara N et al (2009): Relationship between reading / writing skills and cognitive abilities among Japanese primary-school children: normal readers versus poor readers (dyslexics). Read Writ (online available).
- 19) 宇野彰・堀口寿広・山田裕康・加我牧子 (1999) : 学習障害 (LD) 児および周辺児・者の日常生活におけるハンディキャップに関する調査研究. 小児の精神と神経, 39, 73-80.
- 20) Wechsler D (1997): Wechsler Adult Intelligence Scale Third Edition. USA, Psychological Corporation, 169.